

第2日目 2023年9月3日(日)

午後の部 14:00~16:30

## シンポジウム

### 若者の地方暮らしから考える新時代の家族

趣旨説明：永田夏来（兵庫教育大学） 荒牧草平（大阪大学）

討論者：久保田裕之（日本大学） 田淵六郎（上智大学）

#### 【企画趣旨】

今期の研究活動委員会が企画するシンポジウムでは、新時代の家族を主軸とし、家族社会学者がこれからの家族について発展的に調査研究するための共通認識や基盤作りを目指していく。初回となる第33回大会シンポジウムは、地方で暮らす若者を通じて具体的な「新しい」状況について理解を深めることを意図して企画された。

戦後長らく自明視されてきた皆婚社会の崩壊、離再婚の一般化など、日本の家族は新しい状況に置かれつつあると言われている。山田昌弘は、高度経済成長期に一般化した性別役割分業に基づく「戦後型家族モデル」が依然として国内では維持されており、それが形成できる者（基本的には正規雇用の男性とそのパートナーである女性）とできない者の二層に若者が分かれていること、時代の変化を受けて増大するのは後者であることを指摘している。「戦後型家族モデル」からこぼれ落ちる側の内実は多様であるが、そのような人々の出現を日本社会は想定していなかった。このため、貧困など様々な社会問題が生じることになると山田はいう（山田 2019）。

山田が論じるような格差、不平等、社会的排除等は、どの世代にも認められる現象ではあるが、インターネットの普及やコロナの影響は、特に若い世代の働き方や住まい方に様々な変化をもたらしていると言われる。また、そうした変化の様相は、地域によって異なることも予想される。そこで今回は、若者の生活や労働、およびそれらの地域差について議論を深め、新時代の家族を考えるスタートラインとしたい。

本シンポジウムでは、一人目の登壇者として、大型ショッピングモールでの消費や顔見知りの友人、家族を中心とした人間関係の「ノイズのなさ」に注目しながら、地方における若者の暮らしと働き方について論じた阿部真大氏をお迎えする。もう一人は、地方中枢拠点都市圏と条件不利地域圏を比較して両者の生活満足度に差が見られないこと、その背景のひとつに条件不利地域圏は「不便」であるがゆえに相対的に広いネットワークやモビリティを達成している点があることを指摘した響田竜蔵氏である。SNSを活用する今般の若者の中には、広範囲なパーソナルネットワークを持ち、居住地域を超えた「ネットワーク資本」を活用して様々な働き方や生活スタイルを実践している者もいる。インターネットの普及やモビリティ促進の帰結であるトランスローカルなネットワークに注目したこれらの報告は、新しい時代の家族について考える上でも多角的な示唆に富むものと期待できる。討論者である久保田裕之氏にはシェア居住や若者の親密性についての実証的・理論的観点から、田淵六郎氏には家族社会学の理論、方法論的な観点からそれぞれ議論を加えていただけるよう依頼した。

阿部、響田両氏の議論は、終身雇用と年功序列に基づいた働き方や、暮らしやすい大都市と暮らしにくい地方都市といった対比を問い直し、高度経済成長期を前提とした社会モデルについて再考をうながすという視点も持ち合わせている。労働社会学、地域社会学に基づいたこのような問題意識は、「戦後型家族モデル」をめぐる家族社会学の論点と重なるように思われる。機能分化した近代社会をとらえる必要から連字符社会学が成立したのは周知であるが、ゼロ年代以降その境界があいまいになってきたとの指摘もある。家族社会学以外の社会学者との対話をふまえ、家族社会学における新しい視点を発見し構想する場となれば幸いである。

文献：山田昌弘，2019，「日本の家族のこれから—家族関係のバーチャル化をめぐって」『中央大学社会科学研究所年報』（24）：113-123。

キーワード：若者、地方、ライフスタイル